

しんぱん しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいよんしゅう

ぶつぽう

しゃかい

第四章 仏法と社会

せいめい

そんげん

生命とその尊厳

いま ためん み にかい かぎ よかい み
今しばしば他面を見るに、ただ人界のみに限つて余界を見
ず。 じめん 自面もまたまたかくのごとし。 しんじん いかんが信心を立てん
や。

こた 答う。 ためん しばしば他面を見るに、ある時は喜び、ある時 とき

いか は瞋り、ある時は平らかに、ある時は貪り現じ、ある時 とき

おろ げん は癡か現じ、ある時は諂曲なり。瞋るは地獄、貪るは とき てんごく

がき おろ 餓鬼、癡かは畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天、平らか ちくしよう てんごく しゅら よろこ てん たい

にん なるは人なり。 ためん 他面の色法においては六道共にこれ有り。 しきほう ろくどうとも あ

ししよう みようぶく あらわ 四聖は冥伏して現ぜざれども、 いさい 委細にこれを尋ねばこれ たず

あ
有るべし。

（006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄

によらいのめつこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしよう

せいめい
そんげん

生命とその尊厳127ページー3行

いま たにん かお み

にんかい

ほか

今よく他人の顔を見ても、ただ人界ばかりがあらわれていて他の

くかい み

おな

じぶん

かお み

にんかい

九界は見られません。同じように自分の顔を見てもまた人界ばかり

じっかい

ごぐ

しん

で、どうして十界が互具するということが信じられるでしょうか。

こた

いま

たにん

そう

み

よろこ

答えていうには、今よくよく他人の相を見るとあるときは喜び、あ

いか

たい

むさぼ

ひようじよう

るときは瞋り、あるときは平らかに、あるときは貪りの表情を

あらわ

おろか

げん

とき

てんごく

現し、あるときは癡を現じ、ある時は諂曲（おごったり、へつら

しゅら そろ

ろくどう りんね

すがた

つたりする修羅の相) です。これらはすべて六道が輪廻する姿であ

いか じごく むさぼ

がき おろか ちくしょう てんごく

つて、唄るのは地獄、貪るのは餓鬼、癡は畜生、諂曲なるは

しゅら よろこ てん たい

にんかい

たにん

修羅、喜ぶは天、平らかなるは人界なのです。このように他人の

そう ろくどう

ししょう ほとけ ぼさつ

相には六道がすべてそなわっているものであり、四聖（仏・菩薩・

えんがく しょうもん しかい みょうぶく

にちじょう あらわ

縁覚・声聞の四界) は冥伏していて日常には現れませんが、

さが もと

くわしく探し求めるならばかならずそなわっているのです。

いっしんほうかい

むね

じっかいさんぜん

えしやう

しきしん

ひじやうそうもく

一心法界の旨とは、十界三千の依正・色心・非情草木・

こくうさつど

のぞ

塵

のこ

いちねん

こころ

おさ

虚空刹土、いずれも除かずちりも残らず一念の心に収め

いちねん

こころ

ほうかい

へんまん

さ

ばんぽう

て、この一念の心、法界に遍満するを指して、万法とは

い

云うなり。

015

一生成仏抄

いっしやうじやうぶつしやう

せいめい

生命とその尊厳

そんげん

316

ページー10行

ほつしよう　みょうり　ぜん　じょう　にほうあ　ぜんぼう　くん　まよ　な

法性の妙理に染・浄の二法有り。染法は薰じて迷いと成

じょうほう　くん　さと　な　さと　すなわ　ぶっかい　まよ

り、浄法は薰じて悟りと成る。悟りは即ち仏界なり。迷

すなわ　しゅじょう　めい　ご　にほう　に

いは即ち衆生なり。この迷・悟の二法、二なりといえど

ほつしようしんによ　いちり

も、しかも法性真如の一理なり。

たと　すいしょう　たま　にちりん　む　ひ　と　げつりん

譬えば、水精の玉の、日輪に向かえば火を取り、月輪

む　みず　と　たま　たい　いち　えん　したが

に向かえば水を取る。玉の体は一なれども、縁に随つて

く　おな　しんによ　みょうり

その功同じからざるがごとし。真如の妙理もまたまたかく

いちみょうしんによ　り　あくえん　あ

のごとし。一妙真如の理なりといえども、悪縁に遇えば

まよ　な　ぜんえん　あ　さと　な　さと　すなわ　ほつしよう

迷いと成り、善縁に遇えば悟りと成る。悟りは即ち法性

なり。迷いは即ち無明なり。

038 当体義抄

生命とその尊嚴 613 ページ 15 行

あらゆる生命には不思議な原理として、“染浄の二法”がありま

す。染法が働くならば迷いとなり、浄法が働けば悟りとなりま

す。この悟りが、すなわち仏界であり、迷いは、衆生すなわち

九界となるのです。この迷いと悟りとは二であるけれども、しかもそ

の根底においては共通した法性真如の一理なのです。たとえ

ば、水精の玉は太陽に向ければ火と取り、月に向ければ水を取り

たま　ひと

えん

はたら

おな

ます。このように玉は一つですが、縁によつてその働きが同じでは

じっかい

びようどう

さべつ

しんり

ないようなものです。十界にそなわつた平等で差別のない真理も、

ほんらい

せいめい

ひと

また、このようなものです。本来、生命というものは、ただ一つの

ふしぎ

しんじつ

わる

えん

不思議な真実でありのままのものではありませんが、悪い縁にあえば

まよ

よ

えん

さと

さと

迷いとなり、善い縁にあえば悟りとなるのです。悟りはすなわち

ほつしよう

まよ

むみよう

法性であり、迷いはすなわち無明なのです。

しょう し ふた ことわり しょうじ ゆめ ことわり もうぞう

生と死と二つの理は、生死の夢の理なり、妄想な

てんどう ほんがく うつつ わ しんしょう ただ

り、顛倒なり。本覚の寤をもつて我が心性を糾せば、

しょう はじ な ゆえ し お な すで

生ずべき始めも無きが故に、死すべき終わりも無し。既

しょうじ はな しんぼう ごうか や すいさい

に生死を離れたる心法にあらずや。劫火にも焼けず、水災

く けんとう き きゆうせん い

にも朽ちず、剣刀にも切られず、弓箭にも射られず。

けし なか い けし ひろ しんぼう ちぢ

芥子の中に入れども、芥子も広からず、心法も縮まらず。

こくう なか み こくう ひろ しんぼう せま

虚空の中に満つれども、虚空も広からず、心法も狭から

ず。

せいめい そんげん
生命とその尊厳 712 ページ 17 行

せい し

くかい まよ

ゆめ なか た

生と死というものは、九界の迷いのなか、あたかも夢の中の立

わ ぼんぷ まよ かんが

て分けなのであり、それは凡夫の迷った、ひっくりかえった考えな

ほとけ さと せいめい きゆうめい

う

のです。仏の覚めた悟りから生命を究明していけば、生まれてく

はじ し お

る初めもなく、したがって死んでいく終わりもないのです。いわゆる

せいし ちようえつ せいめい

せい

生死というものからは超越しているのが生命です。ですから、生

めい にんげんせかい はめつ お たいか や

命そのものは人間世界が破滅するとき起こる大火にも焼けず、どんな

すいがい ほん かたな き ゆみや い

水害にも滅びません。また刀でも切ることができず、弓矢で射るこ

せいめい きわ ちい

ともできません。さらに生命というものは、極めて小さいケシのな

ひろ

せいめい ちぢ

かにいれてもケシが広がるのでもなく、生命が縮まるというのでも

おおぞら み

おおぞら ひろ

ありません。大空に満ちわたらせても、大空が広すぎるということ

せいめい せま

もなく、生命が狭すぎるというのでもないのです。

はちまんしせん ほうぞう わ みひとり につきもんじよ

しかれば、八万四千の法蔵は我が身一人の日記文書なり。

049 三世諸仏總勘文教相廃立（總勘文抄）
さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう そうかんもんじよう

せいめい そんげん

生命とその尊嚴 713 ページ 13 行

はちまんよんせん ぶつぽう おし

したがって、八万四千のあらゆる仏法の教えというものは、一個

にんげん せいめい じんせい と あ につき

の人間の生命、人生そのものを説き明かした日記のようなものなの

です。

心こころの不思議ふしぎをもつて経論きょうろんの詮要せんようとなすなり。

049 三世諸仏さんぜしよぶつ總勘そうかん文教もんしやう相もんきやう廢立そうはいりゆう（總勘そうかん文抄もんしやう）

生命せいめいとその尊嚴そんげん
714 ページ 4 行

総そうじて一代いちだいの聖教しょうぎょうは一人ひとりの法ほうなれば、我わが身みの本体ほんたいを能よく能よく知るべし。

049 三世諸仏さんぜしよぶつ總勘そうかん文教もんきょう相廢そうはいりゆう立りゅう（總勘そうかん文抄もんしょう）

生命せいめいとその尊嚴そんげん
718 ページー10 行

この身の中につぶさに天地に倣うことを知る。知んぬ、

頭の円かなるは天に象り、足の方なるは地に象り、身

の内の空種なるは即ちこれ虚空なり。腹の温かなるは春

夏に法り、背の剛きは秋冬に法り、四体は四時に法

り、大節の十二は十二月に法り、小節の三百六十は

三百六十日に法り、鼻の息の出入りは山沢溪谷の中の

風に法り、口の息の出入りは虚空の中の風に法り、眼

は日月に法り、開閉は昼夜に法り、髪は星辰に法り、

眉は北斗に法り、脈は江河に法り、骨は玉石に法

り、
ひにく 皮肉は地土に法り、毛は叢林に法り
じど のつと け そうりん のつと

049 三世諸仏総勘文教相廃立 (総勘文抄)
さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう そうかんもんしよう

せいめい 生命とその尊厳
そんげん 718 ページ 12 行

こころ しきほう ふに ほう

およそ心と色法とは不二の法にてあるあいだ、かきたるもの

ひと ひんぷく そう

物をもつて、その人の貧福をも相するなり。しかれば、

もんじ いっさいしゆじょう しきしん ふに かたち なんじ もんじ

文字はこれ一切衆生の色心不二の質なり。汝もし文字

た なんじ しきしん た なんじ ろつこん

を立てざれば、汝が色心をも立つべからず。汝、六根を

はな ぜん ほうもん いっくこた せ

離れて、禅の法門一句答えよ」と責むべきなり。

しよしゅうもんどうししょう

053 諸宗問答抄

せいめい そんげん

生命とその尊厳 772 ページ 15 行

「き帰」われとは我らが色法なり。「みよう命」われとは我らが心法なり。

しきしん ふに色心不二なるをいちごく い一極と云うなり。

095
御義口伝
おんぎくでん

せいめい生命とその尊嚴そんげん
984 ページ 10 行

“き帰”わたしとは、しきほう いみ私たちの色法を意味し、“みよう命”わたしとは、わたし私たちの

しんぼう いみ心法を意味するのです。しきほうこの色法すなわち肉体・物質と、にくたい ぶっしつ心法す

せいしん こころ はたら ふに いったいなわち精神・心の働きが不二（一体）いちごく くらい ほとけなのを一極の位（仏）

というのです。

「宝」とは、五陰なり。「塔」とは、和合なり。五陰和合をもつて「宝塔」と云うなり。この五陰和合とは、妙法の五字なりと見る、これを「見」とは云うなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、「見宝塔」なり。

095 御義口伝

生命とその尊嚴
1031 ページ 5 行

しつぽう

「七宝」

とは、

もん しん かい

聞・信・戒・

じよう

定・進・

しん しや

捨・慙なり。

また

また

い

云わく、

頭上の七穴なり。

ずじよう

しちけつ

おんぎくでん

(095 御義口伝

せいめい

そんげん

生命とその尊嚴

1031

ページー9行)

なな

たから

もん

しん

かい

じよう

しん

しや

ざん

七つの宝とは、

聞・

信・

戒・

定・

進・

捨・

慙のことで、

しちしようざい

ぶつぽうしゆぎよう

かなめ

ほうざい

七聖財

(仏法修行の要となる法財)

ともいわれます。また

しつぽう

ずじよう

しちけつ

ふた

め

ふた

みみ

ふた

はな

七宝とは、

頭上の七穴、すなわち二つの目、二つの耳、二つの鼻

あな

ひと

くち

の穴、一つの口をいうのです。

い^いわゆる、なんみようほうれんげきよう南無妙法蓮華經と唱え奉^{とな}るは、たてまつ自身^{じしん}の宮殿^{きゆうでん}
に^い入るなり。

095 おんぎくでん
（御義口伝）

せいめい生命とその尊嚴^{そんげん}
1095 ページ 4 行

父母果縛の肉身を妙法蓮華經と礼拝するなり。

095 御義口伝

生命とその尊嚴
1114 ページ 17 行

世せ間けんに人ひとの恐おそるるものは、火ほ炎のおの中なかと、刀つ劍るぎの影かげと、この
身みの死しするとなるべし。牛ぎ馬ゆうなうばお身みを惜おしむ、いわんや
人じん身しんをや。癩らい人にんないお命のちを惜おしむ、いかにいわんやそうにん壯人を
や。

(122 佐渡御書 さどごしよ)

生命せいめいとその尊そん嚴げん 1284 ページ 11 行

世せ間けんにおひといて人おがおそろしいと思おもうものは、火ひの中なかにつつまれるこ
とと、刀かで斬たられようとするきことと、自じ分ぶん自じ身しんが死しぬといにんげんうことと
しよう。牛うしや馬うまでさえ命いのちを惜おしむものです。まして人にんげん間ははなおさら

らいびょうにん

いのち

お

けんこう

ひと

のこ事です。癩病人でも命を惜しむものです。まして健康な人は
なおさらのこ事です。

いのち　もう　もの　いつしんだいいち　ちんぽう　いちにち

命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれを

延　せんまんりよう　こがね　過　ほけきよう　いちだい

のぶるならば、千万両の金にもすぎたり。法華經の一代

しようぎよう　ちようか　もう　じゆりようほん　故

の聖教に超過していみじきと申すは、寿量品のゆえぞ

かし。

か　えんじようごうしよ
(130可延定業書

せいめい　そんげん
生命とその尊嚴　1308　ページー9行

いのち　じぶん　いちばんきちよう　たから　いちにち

命というものは、自分にとって一番貴重な宝です。一日でも

じゆみよう　の　せんまんりよう　おうごんいじよう　かち

寿命を延ばすならば、千万両の黄金以上の価値があるのです。

ほけきよう　しゃくそんいちだい　きようきよう　こ

法華經が釈尊一代のすべての經教に超えてすばらしいというの

によらいじゅうりょうほんだいじゅうろく

は、如来寿量品第十六があるからです。

えんぶだいいち たいし

たんめい くさ

軽

閻浮第一の太子なれども、短命なれば草よりもかるし。

にちりん

ちしや

わかじに

い

いぬ

おと

日輪のごとくなる智者なれども、夭死あれば生ける犬に劣

はや

こころ

たから

ごたいじ

る。早く心ざしの財をかさねて、いそぎいそぎ御対治あ

るべし。

(130 可延定業書

か えんじようごうしよ

生命とその尊厳

せいめい

そんげん

1308

ページー10行)

せかいいち

おうじ

たんめい

ひと

いのち

くさ

世界一の王子であつても、短命であれば(その人の命は)草よ

かる

たいよう

すぐ

ちえ

りも軽くなつてしまいます。また、太陽のような勝れた智慧をもつ

ひと

わか

し

い

いぬ

おと

人であつても、若くして死んでしまつては、生きている犬にも劣り

はや しんこう ざいさん つ かさ すみ びょうき たいじ
ます。早く信仰の財産を積み重ねて、速やかに病気を対治してい
きなさい。

かえすがえす、身みの財たからをだにおしませ給わば、この病治やまい
えがたかるべし。

いちにち いのち さんぜんかい たから 過と そろろう
一日の命は三千界の財にもすぎて候なり。まず

おんこころざし 見見 たも
御志をみみえさせ給うべし。

（130 可延定業書
かえんじょうごうしょ）

せいめい
生命とその尊嚴そんげん
1309 ページ 4 行

善ぜんと悪あくとは無始むしよりの左右そうの法ほうなり。

（139 治病大小権実違目
じびようだいししょうこんじつのもく

生命せいめいとその尊嚴そんげん

1331 ページ 10 行

なんによこうえ

なんみようほうれんげきよう

唱

まさしく男女交会のとき、南無妙法蓮華經となうるところ

ぼんのうそくぼだい

しょうじそくねはん

ろを煩惱即菩提・生死即涅槃というなり。

しじょうきんごどのごへんじ

ぼんのうそくぼだい

こと

(194 四条金吾殿御返事 (煩惱即菩提の事))

せいめい

そんげん

生命とその尊嚴

1521

ページー9行

うじよう だいいち たから いのち 過 うば もの
有情の第一の財は、命にはすぎず。これを奪う者は、

かなら さんず お
必ず三途に墮つ。

しゆくんににゆうしほうもんめん よどうざい じ よどうざい まぬか こと
（197 主君耳入此法門免与同罪事（与同罪を免るるの事）

せいめい そんげん
生命とその尊嚴 1539 ページー15 行

そ じつぼう えほう しゅじよう しょうほう えほう かげ

夫れ、十方は依報なり、衆生は正報なり。依報は影のご

しょうほう たい み かげ しょうほう

とし、正報は体のごとし。身なくば影なし、正報なくば

えほう しょうほう えほう

依報なし。また正報をば依報をもつてこれをつくる。

ずいそうごしよ

(202 瑞相御書

せいめい そんげん

生命とその尊厳 1550 ページー14 行)

じつぼうせかい えほう しゅじよう しょうほう えほう

およそ十方世界は依報であり、衆生は正報です。依報は、たと

かげ しょうほう たい み かげ

えば影であり、正報はその影をつくる体です。身がなければ影が

しょうほう えほう しょうほう

ないように、正報がなければ依報ありません。また、その正報

えほう たい

は、依報をもつてその体をつくっているのです。

まっぼう い

ほけきよう

たも

なんによ

姿

ほか

ほうとう

末法に入つて法華經を持つ男女のすがたより外には宝塔な

きせんじようげ

選

きなり。もししからば、貴賤上下をえらばず、

なんみようほうれんげきよう

唱

わ

みほうとう

わ

南無妙法蓮華經となうるものは、我が身宝塔にして我が

み たほうによらい

身また多宝如来なり。

あぶつぼうごしよ

ほうとうごしよ

263 阿仏房御書 (宝塔御書)

せいめい

そんげん

生命とその尊厳

1732

ページー15行)

まっぼう

はい

ほけきよう

しん

だんじよ

すがた

ほうとう

末法に入つて法華經を信ずる男女の姿のほかには宝塔はないの

みぶん

とうと

いや

じようげ

です。もしそうであるならば、身分が貴いとか賤しいとか、上下に

かんけい

なんみようほうれんげきよう

とな

もの

み

は関係なく、南無妙法蓮華經と唱える者は、そのままわが身が

ほうとう

宝塔であり、

み

わが身がまた多宝如来なのです。

たほうによらい

いま あぶつしょうにん いっしん ち すい か ふう くう ごだい
今、阿仏上人の一身は地・水・火・風・空の五大なり。

ごだい だいもく ごじ
この五大は題目の五字なり。

あぶつぼう ほうとう ほうとう あぶつぼう
しかれば、阿仏房ながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、

ほか さいかくむやく
これより外の才覚無益なり。

あぶつぼうごしよ ほうとうごしよ
263 阿仏房御書（宝塔御書）

せいめい そんげん
生命とその尊嚴 1733 ページ 1 行

あぶつしょうにん からだ ち すい か ふう くう ごだい
いま阿仏上人の体は、地・水・火・風・空の五大でできていま

ごだい だいもく ごじ
す。この五大は題目の五字です。ですから阿仏房はそのまま宝塔で

ほうとう あぶつぼう さと さいかく
あり、宝塔はそのまま阿仏房なのです。これを覚るよりほかの才覚

かんが
(考え、

さいち
才知)

はむだなことです。

地獄じごくは地獄じごくのすがた相を見せたるが実じつの相すがたなり。がき餓鬼へんと変

ぜば、地獄じごくの実じつのすがた相にはあらず。仏ほとけは仏ほとけのすがた、

凡夫ぼんぷは凡夫ぼんぷのすがた、万法ばんぽうの当体どうたいのすがたが妙法蓮華經みょうほうれんげきよう

の当体どうたいなりということしよほうじつそうしようを、諸法実相もうとは申すなり。

(280 諸法実相抄

せいめい せうげん
生命とその尊嚴 1789 ページ 15 行)

地獄じごくは地獄じごくのありのままの姿すがたを見せるのが実相みです。もし地獄じごくが

餓鬼がきへと変われば、それは地獄の実相じごくではありません。すなわち、

仏ほとけは仏ほとけのありのままの姿すがた、凡夫ぼんぷは凡夫ぼんぷのありのままの姿すがた、この

せかい

すがた

みようほうれんげきよう

世界のすべてのもののありのままの姿が妙法蓮華經そのものであ

しよほうじつそう

るということ諸法実相というのです。

せん ばんぼう こしん おさ いちじん 欠 くせん

詮ずるところ、万法は己心に収まつて一塵もかけず、九山

はつかい わ み そな にちがつ しゅしょう こしん

八海も我が身に備わつて日月・衆星も己心にあり。しか

もうもく もの かがみ かげ う み

りといえども、盲目の者の鏡に影を浮かべるに見えず、

えいじ すいか おそ げてん げどう ないてん

嬰兒の水火を怖れざるがごとし。外典の外道、内典の

しょうじよう ごんだいじようとう みな こしん ほう かたはしかたはしと

小乗・権大乘等は、皆、己心の法を片端片端説いて

そうろう

候なり。

（353 蒙古使御書

もうこのつかいごしよ

せいめい そんげん

生命とその尊嚴 1947 ページ7行

われ　　こころ　　うち　　ちち　　悔　　はは　　疎　　ひと
我らが心の内に父をあなずり母をおろかにする人は、
じごく　　ひと　　こころ　　うち　　そうろう　　たと　　はちす　　種　　なか　　はな
地獄その人の心の内に候。譬えば、蓮のたねの中に華
と菓^みとのみ^見ゆるがごとし。

（390 十字御書　　むしもちごしよ）

せいめい　　そんげん
生命とその尊厳
2036　　ページー12行

いのちと申す物は、一切の財の中に第一の財なり。

命 もう もの いっさい たから なか だいいち たから

さんぜんかい へんまん しんみよう あたい

「三千界に遍満するも、身命に直するもの有ることな

説

さんぜんだいせんせかい

満

そうろうたから

し」ととかれて、三千大千世界にみてて候財も、

命

替

そうろう

命

いのちにはかえぬことに候なり。されば、いのちは

灯

じき

油

ともしびのごとし。食はあぶらのごとし。

はくまいいっぴようごしよ

397 白米一俵御書

せいめい

そんげん

生命とその尊厳

2052

ページー9行

せいめい

ざいほう

さいこう

ざいほう

生命というものは、あらゆる財宝のなかでも最高の財宝です。

さんぜんかい へんまん

ざいほう

しんみよう

あたい

「三千界に遍満する財宝といつても、身命に値するものはあり

きようもん と

せかいじゅう み

えない」と経文に説かれているように、世界中に満ちあふれさせた

ざいほう

せいめい

とうと

財宝をもつてしても、生命にはかえられないほど尊いものなので

せいめい

ささ

す。したがって生命はともしびのようなものであり、それを支える

しょくもつ

あぶら

食物は油のようなものなのです。

たから
財あるも財なきも、
いのち
命と申す財にすぎて
もう
候財は候
たから
わす。
過
そうろうたから
そうら

はくまいいつぴようごしよ
397 白米一俵御書

せいめい
生命とその尊厳
そんげん
2052
ページー16行